

＜シンポジウムの記録＞
農業・農山村の価値と日本社会再生への展望

2017年1月28日（土） 会場：一橋大学



【プログラム】

＜総合司会＞ 傅 喆（一橋大学大学院経済学研究科 特任講師）

＜第Ⅰ部：上映会&特別講演＞

豊田直巳（フォトジャーナリスト）

上映会：ドキュメンタリー

『奪われた村：避難5年目の飯舘村民』上映

特別講演：放射能汚染地帯の復興を考える

—原発震災取材の6年から—

＜第Ⅱ部：特別講演＞

栗田和則（暮らし考房代表、農林家）

山里の暮らし25年の取り組み

＜パネル討論＞

司会・進行：寺西俊一（一橋大学大学院経済学研究科 特任教授）

パネリスト：上記の特別講演者2名

安藤光義（東京大学大学院農学生命科学研究科 教授）

石田信隆（農林中金総合研究所 客員研究員）

寺林暁良（農林中金総合研究所 主事研究員）

森田 慧（一橋大学 農業サークルぼてと 前代表）



佐藤 宏
一橋大学 理事・副学長



中島隆男
農林中央金庫 常務理事

本記録は、農林中央金庫が一橋大学に開設している寄附講義「自然資源経済論」特別講義の一環として開催された市民公開シンポジウムの概要を農林中金総合研究所の責任においてとりまとめたものである。

＜第 I 部 上映会&特別講演＞

放射能汚染地帯の復興を考える ——原発震災取材の6年から——

豊田直巳
(フォトジャーナリスト)

はじめに、豊田氏が監督・撮影のドキュメンタリー『奪われた村：避難5年目の飯館村民』が上映された。福島第一原発事故発生直後から飯館村の実像を追い続けてきた豊田氏によるドキュメンタリーの2作目であり、原発事故から4年経過した飯館村の今を映像と村民へのインタビューで伝えるものである。ドキュメンタリー上映の後、豊田氏による特別講演が行われた。

原発事故取材に至るまで

もともとは写真を撮って、原稿を書く仕事をしていました。海外の取材がほとんどでしたので、年々新聞や雑誌が売れなくなるなか、取材したものをいち早く報告するために映像を撮って、テレビの報道番組で流してもらうようになりました。

その中で私が主に扱ったのは劣化ウランの問題です。劣化ウランは、原子力発電所で使用するウラン燃料をつくる際に生成される副産物で、放射性廃棄物です。しかし、アメリカ軍は従来タングステンを使う戦車や攻撃機の鉄砲の弾に劣化ウランを使いました。

1991年の湾岸戦争で初めて使われ、劣化

ウラン問題が初めて表に出てきました。そして、放射能汚染の取材を始めたのが1999年くらいです。イラクの子供たちが白血病になっ



ている様子や経済制裁でイラクの人々が死んでいる様子をテレビ番組で放映しました。

2011年は1986年のチェルノブイリ原発事故からちょうど25年目だったので、ある番組の企画で取材に行きました。そこでわかったのは、国家は何でもする、国家にとって都合のいいように自国を守るという国家の論理があるということでした。チェルノブイリの汚染地図を見ると、モスクワだけ放射能汚染がないのです。高濃度に汚染しなかったのは、雨を使って放射性物質を落とす作戦によるもののようで、この作戦に参加した兵士や汚染されたところの人たちを取材しました。

この内容を放送しようと準備していたところで、日本で原発事故が起こってしまったので、翌日から福島取材に入りました。イラク、チェルノブイリの取材を経て、自分で準備していた線量計や安定ヨウ素剤を

持っており、マスクなどの必要な対策も同行者に指示できたためです。

飯舘村で目の当たりにした現実

原発事故の翌々日から双葉町、原発から直線で3.5キロくらいのところまで6人で行きました。3人が測定限界の異なる線量計を持っていたのですが、この3台とも測定限界を超えてしまい、1ミリシーベルト(mSv/h)を超える放射線量がとびかっていることだけはわかりました。この事実をプレスリリースしましたが、枝野官房長官(当時)がただちに影響はないということだけ繰り返していた時期ですから、すごく話題になりました。

それから6年たって今何が起きているのかは、今見ていただいたとおりです。飯舘村は原発からは30~45キロ圏ですから、彼らは被ばくなんて全く関係ないと思っていました。だからこそ、若い人で機転がきく人、インターネットを使える人は早く逃げたのですけれども、大半は村に残ってしまったので、大量被ばくをしてしまいました。ドキュメンタリーの最後で、お母さんが子供たちを被ばくさせたと話していましたが、取り返しがつきません。

飯舘村も今年の3月31日に避難指示が解除されます。この指示解除と、東京電力の賠償打ち切りが連動しています。国の避難指示解除は、東京電力にとって避難指示区域の安全が確認されたことを意味します。安全なのに帰らないのは、避難する人の好き勝手だから、賠償、精神的慰謝料をスト

ップしますよという理屈です。

人は放射能だけを気にして生きていません。社会的動物です。働く場所、子供たちの学校、農地、どうするのでしょうか。ドキュメンタリーに登場した農家の方は、農地を荒らしておくのは見るに忍びないということで、今年度からそばの栽培の実験をしています。そばを売ろうと表向きは言うけれども、売れるとは思っていません。戻る人がほとんどいないなかで、65歳が一番若い世代になります。農地を保全するうえで大型機械に頼らざるを得ません。

帰ると戻るは違う

アンケート調査をすると、どの市町村でも2割から3割が帰ると回答します。ただし、アンケートは震災時の世帯に配っていますから、現実を見誤ると思うのです。震災前は、3~4世代で1軒の家に住んでいましたが、避難と同時に少なくとも2世帯以上に分かれています。仮設住宅にも入らず、家を建てているような若い世代は帰りません。震災後の世帯数は元の約2倍となるため、世帯の2割が帰るというアンケート調査の結果は、震災前の人口の1割に満たない人数しか帰らないことを意味します。しかも、70、80、90歳の高齢者が帰ったときに本当に生活ができるのかということを想像してみてください。

ドキュメンタリーに出たおばあさんは、震災前に畑で野菜をつくっていましたが買ったことがありません。震災後は、村内の畑の野菜を食べたくないし、畑仕事の楽

しさも何もないと言います。そして、村に戻ったら買おうとしても、売っているところがないのです。売店まで行くためには、軽トラックを運転できなければなりません。病院に行くのも状況は同じです。仮設住宅では、「ここはいいよ。病院近いから」とよく聞きます。

最近年寄りたちが「帰ると戻るは違う」と言います。家に風を通したり、片付けしたり、お盆や正月に草刈りをやるために時々帰っています。でも、生活するために戻ることは悩んでいるのです。震災前は、自転車や徒歩で回覧板を回していました。でも、1～2割の世帯しか戻らなければ、軽トラックで回覧板を持っていかなければなりません。

小中学校を「戻す」

飯舘村には白石小学校、草野小学校、飯舘小学校という3つの小学校があります。そして、今は3つの小学校が川俣町にある仮設校舎で、一緒に勉強しています。

飯舘中学校と飯舘村の小学校は、村内にある中学の校舎をリフォームして2018年に戻ることになっています。村が戻すと決めました。その結果、現在、小学校には3校で約100名の生徒がいますが、17年4月から50名になります。18年には20名いないと言われています。

親は、福島市などの避難先から遠く、放射能の心配もある村の学校になぜ行かせなければならないのかと思っています。それでも「戻す」ことを強行するのです。恐ら

くこの20名は、もしかしたら10名になるかもしれません。こうなることを村も読んでいて、小中一貫校にして、保育園と幼稚園を合わせてこども園にして、全部一緒にするのです。そして、福島市、伊達市、南相馬市など、ばらばらになった子供たちをスクールバスで通わせると言うのです。

学校を村に戻すために、除染やリフォームに使ってしまったお金が57億円です。生徒1人当たり2億円ぐらい使っています。57億円は、震災前の飯舘村の1年間の経常予算です。これを、3か月くらいで使うわけです。そういうことがまかり通っているので、若い人たちの間には自分の村だという意識が消えていきます。もうかかわりたくないという思いです。震災時6,300人の村民は今、約6,000人です。

除染の顛末

震災の年の冬くらいから、役場の近くの老人ホームで除染が始まりました。白い服は防護服と呼びますが、放射線を防護しません。防護服はあくまでも放射性物質を家の中や車の中に入れないためのもので、1着1,000円くらいしますが、数万人が毎日捨てます。膨大な量になります。除染費用は東電が支払うことになっていましたが、2.6～4.8兆円ほど使ったので、今度から皆さんの税金で賄おうという話が進められています。

東京では草刈りと言いますが、福島では除染と言います。屋根を水で洗う、これも除染ですが、放射性物質が川を伝わって海

を汚染するとの批判が出ましたので、屋根を雑巾がけするようになりました。放射性物質はとても細かいものですから、瓦屋根やさびたトタン屋根をワイヤーブラシでごしごしこするぐらいでは取り除けませんが、除染として作業します。極めつけは、石垣の石を雑巾で拭いています。作業員たちだって、自分が何をやっているのかわからなくなります。

除染すると、瞬間的に放射線量は半分ぐらいには下がります。でも、病院でよく見る放射線管理区域の線量を上回っているところもあります。環境省は除染目標を「なるべく低くする」とし、目標値を明らかにしません。作業員は一生懸命になりようがないのです。

住民も作業員も、線量が下がらないことに気がつき始めます。「明日に向かって除染中」「力を合わせて除染作業中 復興の思いを込めて」「がんばろう山木屋地区 がんばります除染作業」「作業員の心はひとつ」という旗が各地に立っています。ここに住んでいる人はゼロですから、作業員の士気向上のためかもしれません。本当に除染が役に立っていると思ったら、こんな旗は1つも要らないのです。

さらに、驚くことが次に起こっています。除染した家屋は、半年後更地になり、別の建物を新築するのです。除染は1軒当たり5,000万円くらいかけていると思います。除染したら、次に壊すのです。税金の無駄遣いと言われそうですが、村人に聞くと、「東

京にいれば税金の無駄遣いと思うだろうが、きれいにしてほしいと村に頼めば無料で解体してくれるので、解体をお願いしてしまう」と言います。

仮置き場と作業員の被ばく問題

除染で出た放射性廃棄物はフレコンバッグという黒い袋に入れ、仮置き場に置きます。なぜ仮なのかというと、将来双葉町と大熊町に中間貯蔵施設をつくって、そこに30年間保管する予定になっているからです。でも、中間貯蔵施設の用地買収は1割しかできていません。当然、中間の先に最終があるはずですが、最終がありません。現状は、仮置き場が全く足りないから、仮仮置き場、そこも足りないから、仮仮仮置き場までありました。テレビも新聞も仮置き場からと報道していますが、実態は、黒い袋を仮仮置き場から仮仮置き場に、仮仮置き場から仮置き場に、そして仮置き場から中間貯蔵施設に移動させるというものです。しかし、村人は「俺が活着ている間は仮仮置き場でもそのままだろうな」と言います。今、飯館村に黒い袋が230万個以上ありますが、どうするのでしょうか。

放射線は黒い袋を通します。原発の中でも除染でも被ばくしながらの作業です。自分が被ばくしたくないからといって、他人を被ばくさせてよいのでしょうか。被ばく労働という倫理上の問題が生じてくるだろうと思います。

＜第Ⅱ部：特別講演＞

山里の暮らし25年の取り組み

栗田和則
(暮らし考房代表・農林家)

「農林複合家族経営」「自創自給」「人とつながる、時代をつなぐ」

山形県金山町は、人口5,827人、1,800世帯を割っておりますが、町村合併しませんでした。古くから金山杉の産地として、また、日本で最初に情報公開制度や景観条例を取り入れた町として知られております。

杉沢集落は金山町の中で一番山奥に位置し、奥羽山脈から流れ出る1本の川沿いに5キロにわたって10戸が点在しております。私はここで築220年になる曲がり屋に4世代7人で暮らしております。私は中学校を出て、農家の長男として家の跡を継ぎ、農業と林業をして暮らしております。定時制高校に通いながら農業をし続けて、もう55年を超えました。

私はこだわりを持って自分らしく生きてきました。1つ目は、「農林複合家族経営」です。農業経済学者の守田志郎は、自分が農地を大きくするためには他人の土地を取らなければならないことを、地球の皮は1枚しかない、と表現されました。土地を取られれば、土地とのかかわりを持つ暮らしを捨てなければならず、そこに住む意味合いを失う、ということに気づかされました。そのため、私は農業を始めたときから経営

規模をほとんど変えず、農業の中身を変えることで暮らしてきました。

2つ目は「自創自給」の暮らしです。お金持ちになるよりも豊かに暮らせる農林業でありたいと考えてきました。この言葉は、豊かに暮らせる農林業とは何だろうと考えて行き着いたものです。自分たちが何かをつくること、創造していくことに価値があると考えてきました。

3つ目は、川を下って人とつながったり、その時代に生きた自分として何か時代をつないだりするような生き方です。

心するのは、片手はいつもフリーハンドという生き方です。つまり、自分や家族が生きていくために働くのは片手、自分らしい生き方をもう1本の手で探すことです。人の1.5倍くらいは忙しく生きてきたと思います。

「育てる林業」から「切らない林業」へ

広葉樹を切って杉を植える「育てる林業」をやってきました。毎年木を切って収入を得るような山ではなく、私が20歳から40歳までの間に、大体15ha、45,000本くらいの



杉を植えて育ててきました。父から「日銭は残らない。山の働きは貯金だ」と教えられました。

育てる行為や育つということを感じるこのなかに林業のおもしろさがあると思いました。実際、木を植えて10年経てば、山で働いた労働と木が育ったという時間の蓄積が形になってそこにあります。ただし、残念ながら、育てる林業は、お金の計算を捨てることで成り立ちます。

私は40歳のときに、木を育てるのが大事な一方で、木を切らないと生きられないという矛盾に気づきました。そして、「切らない林業」をどうつくっていくか、を意識するようになりました。また、林業人としての誇り、自信も大事な要素になりました。

愉しく誇りあるタラの芽とウルの栽培

1986年、10人の仲間を集めてタラの芽の栽培を始めました。東北の雪の山村から「早春の香り」という名前でタラの芽を出荷します。タラの芽は夏の間、畑で木を栽培して、冬になったらビニールハウスの中で芽を出させて、それを出荷します。

バブル期の前でしたので、日本人みんなが、経済は右肩上がりが続く、農業も、毎年収入が伸びなければだめだと言われていました。でも、私は、農業所得が年々伸びるということはありませんでした。農業は天候に左右されるし、生産量によって値段の変動があります。極端に高くなれば買って食べないということもあります。そういうなかで、何をすれば継続でき

るかと思いました。

その1つが、働いたお金に応援していただいたお金をプラスして、自分を変えるために外へ出てみよう、という取り組みです。「タラの芽は女性が主役」というキャッチフレーズをつくり、当時は考えられなかった女性の名前で出荷をして、女性の口座をつくって、そこに女性の働きが見えるようにするやり方です。その翌年には、「タラの芽植えて海外へ行こう」というキャッチフレーズをつくって、タラの芽基金を始めました。実際、その4年後にヨーロッパに行き、その5年後には中国、さらに5年後にアメリカに女性を派遣いたしました。

私たちは、誰にでもタラの芽の栽培を見せます、苗木を提供しますという「共に生きたい」のスタンスをとっています。情報は発信したところに集まりますし、視察に来る人が質問することで、自分たちの経験に不足していることを気づかせてくれ、自分たちが考える機会をもらえると考えたからです。また、外部に秘密にするということは、実は内部でも秘密主義になってしまうのです。そうするとお互いの技術が上がっていかない、あるいは品質も統一されていかないという欠点を持ちます。

タラの芽は連作を嫌う作物で、その後何をするかという課題がありました。そこで栽培を始めたのが、雪ウルイという山菜です。山形県最上郡の冬は毎日雪か曇りの天気です。そのため、太陽の光が弱く、ウルイの緑が薄くなってしまいます。これだと、市場では2級品だと言われます。そこで、

完璧に遮光し、山菜特有のアクが薄い黄色いウルイを出荷しました。これだと、生で食べられます。包丁のない若い家庭もあると聞いたので、生で食べられる食材をつくるのが大きな成功の鍵になると考えました。今雪ウルイは、最上郡の冬の特産物になっています。タラの芽は、築地市場と、物量日本一と言われる大田市場、この2つから日本一の質の産地という評価、日本一の値段をもらっております。普通、連作障害があつて長くつくることができず、大体10年前後で産地が移動しますが、我々のところは30年続いてきました。

農業を持続させる力は、「楽」しくではなく「愉」しく働くことと、もう1つは、例えば値段が下がったとしても、日本一の評価、価格をもらっているという誇りを持つこと、この2つだと考えてきました。農業の愉しさは、登山で言うなら、一生懸命山を登って、頂上に立ったときの爽快さだと思ってきました。

人間も生き物だから、光が当たらないなかで元気を出せと言われても無理だと思っています。その光の1つがメディアで、大きな力を持っていると考えてきました。新聞などで私たちの取組みを紹介してもらうとき、代表ではなく、一人一人のコメントを載せてほしいとお願いしています。そうすることで、自分のコメントで自分の思いを反芻していくのです。

つくれるものを売れるようにつくる：

メープルの話

もう1つの切らない林業がメープル（イタヤカエデの樹液）をいただくことです。私がメープルに魅せられたのは、哲学者の内山節さんから、30年前に「木糖でコーヒーが飲めたらいいね」と言われたことと、ムラの年寄りから「2月泣きイタヤとって、カエデに傷をつけると泣く。その涙は甘いものだと言ってきた」と聞いたことで、杉沢集落にもイタヤカエデの物語があったのだと気づいたためでした。

樹液は2月末から3月中旬ごろまで採れて、ある気温に達すると急激に出ます。ドリルで穴を入れていくと、最初は1秒間に2滴落ちますがけれども、そのあとは1秒間に1滴くらいしか出ません。

私はいただいた樹液で、いろいろな商品開発をしております。1つはメープルサップというカエデの樹液100%の清涼飲料水で、平成10年から生産しております。メープルシロップも2種類つくっております。国産のカエデの樹液は、カルシウム、カリウムが非常に多く、カナダと同じ濃さにすると、カルシウム、カリウムが結晶になって、沈殿してしまうので、日本の特徴であるカルシウム、マグネシウムを残した糖度42~43度のものと、結晶を除いたカナダと同じ糖度66度以上のシロップもつくりました。

それから、樹液を3分の2以上入れたビールとして、「メープルビール」「メープルヘルビー」をつくっています。メープルビ

ールは、杉沢でいっぱい生えているカラハナソウという野生のホップを使って苦みと香りづけをしてあります。メイプルヘルビーは、エゾウコギという薬木のエキスを入れた健康によいビールで、酒税法により発泡酒となっています。

メイプルビールはカナダにもなく、世界で初めてだというお墨付きを元東京農大の小泉先生からいただいております。またメイプルサップは、今年初めてイギリスに輸出されております。

農業関係の指導者が、売れるものをつくりなさいという話をよくされます。でも、私は、時代とか、地域性とかを加味しながらつくれるものを売れるようにつくることだと思っています。無理して売れるものをつくるという発想ではありません。

木を使うこだわりと「暮らし考房」

私は木を使うことにこだわりがあります。今まで根元の曲がった木や大きくなって朽ちのある木は、みんな捨てられてきました。今、私の息子はそれを逆に探し出し、加工して、1つの仕事として成り立たせております。ところが、今日の社会では、使うより木材需要の拡大、木質バイオマス利用など、売りたいという発想が非常に強いです。

お金ではなく、暮らしという尺度で豊かさを考えたいという思いに至り、暮らしを考える房と書く「暮らし考房」というものを始めました。例えば自分たちが伐採した杉の間伐材の丸太組みと白壁のログハウスを2棟建てました。そして藍染め、普段の

暮らしなどを知ってもらい研修も受け入れてきました。もう25年になりますが、決して農山村は貧しい社会じゃないと伝えたいのです。

25年前、ヨーロッパでグリーンツーリズムを見てきて、農林水産省の方に「どうやって泊めたらいいだろう」と相談しました。そのときに、旅館業法に触れない方法として、特定少数が会費を払って利用する宿泊施設という民泊を始めました。母屋で朝食をとってもらおうと、「気持ち落ち着くね」と言います。このような、古くて時間の蓄積のあるものが与えてくれる安らぎが山里にはたくさんあると思います。

時間が蓄積される里：生きる形はおのずとできてくる

ムラの人たちと一緒に「共生のむら」という名前で都市の人たちを受け入れ、内山節さんを招いて哲学の講座を20年もやってきました。またムラの中に空き家が出たときには、都市の人たちとの共同出資によって買い取り、「山形、金山スロー村」という交流の場として使い始めました。

また、東京・丸の内に「場所文化厨房につぼんの…」という食事処がありまして、地方と都市を結ぶ活動をしようという人たちの仲間に入れてもらって、私たちの産物も提供しております。

私は、20年前に建てた「共生のむら すぎさわ」という看板に回帰しています。山村は自然とのかかわりを大事にし、都市とのかかわりも持つこと、山村は山村だけで

生きていく時代ではないこと、ムラの未来は歴史の延長にあること、と考えました。この思いから、最近10年は「木を植え、石を積む」を実践しています。木は植えれば100年後には森になりますし、石は積みば100年経っても腐らないという発想です。

実践の1つは、カエデにこだわった里をつくっています。木はカエデを植え、苗木も提供し、商品開発、情報発信をしています。それから、日本メープル協会という組織をつくって、その拠点を育てています。国産のメープルに関する資料が200点ほど

集まりましたので、それを公開する「ジャパンメープルワールド」をつくりました。

もう1つは、ムラとは何か、あるいはムラに暮らす哲学とは何だったのかを石碑に刻む「石碑の里」をつくっています。内山節さんは「時間が蓄積される里」という言葉を刻んでくれました。去年私は、本来山里というのは、その人の生きる形はおのずとできてくるのではないかという思いになり、「生きる形のなる里」と掘りました。山里は多様な労働、多様な生き方を可能にする世界ではないかと思っております。

<パネル討論>

司会・進行：寺西俊一

パネリスト：特別講演者2名、安藤光義、石田信隆、寺林暁良、森田 慧

冒頭、パネラーから農業・農山村の価値をめぐる視点・論点が報告された。続いて、参加者から、「日本の中山間地の農村の魅力とは何か」「再生可能エネルギーへ取り組む動きもあるが、経済的部分も含めて農山村の可能性を伺いたい」という質問があり、パネラーがコメントした。なお、紙幅の制約上、パネル討論の一部を収録した。

趣旨説明

寺西俊一（一橋大学大学院 特任教授）

第I部では、飯舘村で蓄積されつつあった農業・農山村の価値が原発事故で一気に失われ、今でも村人が寄せる飯舘村への価値を引き裂き続けていることが報告されました。第II部では、農業・農山村の価値を最大限生かした栗田さんの取組みや生き方が報告されたと思います。第I・II部を通じて、農業・農山村の価値をめぐる両極端の

実態が描き出されましたが、これを踏まえて、農業・農山村の価値、意義などについて議論したいと思います。なお、今回のパネラーは、20代から70代まで、10年おきのオール世代という大変意義深いものとなっています。



「農業サークルぼてと」の紹介

森田慧（一橋大学商学部3年・農業サークルぼてと 前代表）

私の出身は東京・門前仲町で、家の周りにほとんど緑がないところで生活してきました。私が最初に畑に出会ったのは、中学・高校6年間のときの農芸部です。学内にある3m×3mくらいの小さい畑で野菜づくりをしていました。最初は5人ぐらいだったのですが、6年間のうちに40名ぐらいになり、案外反応がいいなと思いました。このことから、農業に潜在的興味を抱いている同年代が多いと感じ、大学に入って、2014年6月15日、「農業サークルぼてと」を設立するに至りました。今では7つの大学から56名ほどが参加しています。

ぼてとの活動の間口は、畑、ピザパーティー、バーベキューなどさまざまで、もともと農業に興味を持っていない人が入ってきます。彼らはぼてとの活動に参加するなかで、畑の楽しさであるとか、野菜のおいしさ、農業の大変さを肌で感じていきます。そして、実際に現場はどうなっているのか、自分たちの力で何かできないだろうか、などと考え、新しい企画が徐々に立ち上がる仕組みをとっています。もともと農業への潜在的興味しか持っていなかった人たちが実際に農業の現場にかかわるというメカニズムを大切にしています。

私たちの活動は主に3つあります。1つ目は野菜づくりです。一橋大学から歩いて約30分のところにある市民農園を借りて野

菜を栽培しています。10坪ほどの本当に小さな畑なのですが、収穫した野菜は各自自由に持ち帰るなどして楽しく活動しています。



2つ目は、ぼてと主催のイベントと大学祭への出店の2つを主とする収穫イベントです。どちらも、私たちが育てた野菜を料理して、それを食べるという形です。一橋祭では、さつまいもであんドーナツをつくりました。このほか、じゃがバター、スープカレーなど、過去5回にわたってのべ3,000食以上提供しました。

3つ目は、会員有志が好きな企画を立ち上げて行う「ぼてと企画室」です。例えばロージナ茶房という喫茶店にじゃがいもを出荷したり、自主ゼミナールを行ったり、地方のフィールドワークを行ったりしてきました。フィールドワークは現場に行ってお話を聞いてくるという企画で、これまでに4回実施し、報告書を作成しました。

これまでのぼてとの活動は、日本農業新聞やNHKなど、たくさんのメディアにも取り上げていただきました。

私たちが活動を通じて得られたことは大きく2つあります。1つ目は、農業に熱い学生はたくさんいるという発見です。潜在的な農業への興味を持っている学生は、ぼ

てとに来る学生だけでなく、全国にもいると考えています。ぼてとは、「食と農林漁業大学生アワード」に参加しましたが、全国から38団体200名以上の学生が参加していました。このほかにも全国で約200の団体が活動されているということで、この動きが全国的なものであるということ、たくさんの方が農業に興味を持っていることがおわかりいただけると思います。

2つ目は、農業の地域性です。フィールドワークでは、青森、北海道、千葉、福井とさまざまな場所を訪問しました。福井県

の農業を例に挙げると、平野部では大規模化した「強い農業」の現場を目にしたのに対して、山間に行くと、地域文化やコミュニティを支える農業があるということを肌で感じました。

このような気づきを踏まえて、自分たちに何ができるのか考えていきたいと思っています。私たちはこれから、農業に興味を持つ学生と、地域のコミュニティを支えるような小規模な農家さんをつなぐ事業を行いたいと考えています。しかし、具体的な事業計画は今後の課題です。

農業・農山村の価値をどう捉えるか？ —環境社会学の立場から—

寺林暁良（農林中金総合研究所 主事研究員）

私は環境社会学の立場から、農業・農山村の価値を論じたいと思います。環境社会学は、公害研究や村落研究をルーツとしており、ご講演者のお2人が話されたような現場のリアリティを重視する学問です。

農業・農山村の価値を考えるため、まずは農村とは何かを整理したいと思います。農村にはいろいろな呼び名があります。「行政村」は、地方自治体としての範囲を指します。明治時代の「行政村」は、今の小学校区くらいの範囲で、コミュニティとしての実態がありましたが、市町村合併を経た現在は、非常に大きな範囲となっています。一方、「自然村」は、住民たちが農業や日常生活を営むために、さまざまな共同作業を

行う範囲で、社会学で「ムラ」と呼ぶものです。

「ムラ」には「集落」と「村落」という2つの捉え方があります。

「集落」は、「ムラ」の景観としての側面を指しますが、人々が暮らす家々の集合だけではなく、田畑や里山などが必ず含まれます。また、「村落」は「集落」の社会組織としての側面を指しますが、社会組織の共同性が必要なのは、田畑や里山などを管理するという目的があるからです。日本の農村は、農業も含めた自然との関係を抜きにしては語れません。哲学者の内山節先生は「村



とか集落というとき、日本の村や集落は伝統的には自然と人間の里を意味している。自然もまた社会の構成者なのである」と述べています。

農村は、自然の恵みをいただく場です。もちろん、産業としての農業が重要であることは言うまでもありませんが、農村生活では兼業や自家消費用として営まれる農業も大きな意味を持ちます。また、キノコ採りのような「マイナーサブシステム」と呼ばれる経済的な観点からは重視されない生業も、愉しさやおすそ分けによる良好な人間関係などにつながる、農村での豊かな生活に欠かせないものです。

一方で、自然は災いももたらします。災害や鳥獣被害などに備えるため、農村では住民がさまざまな社会組織をつくって自然を管理してきました。農地も個人所有地でありながら、「ムラ」で共同管理すべき場所としての意識が根付いています。農地を集めて少人数のオペレーターが経営する集落営農組織でも、農道や水路の管理は、従来どおり「ムラ」の共同管理で行われている場合は少なくありません。そのほうが集落

営農組織の経営としても効率的な場合もあるし、「ムラ」の人たちが自分たちの「ムラ」の管理にかかわり続けることもできるからです。

以上のように、農村は、自然から恵みを受け、自然の災いに備えて管理をするといった社会と自然との相互作用によって成立してきました。そして、この相互作用の蓄積のなかに農村の文化があり、住民にとってその場所に住み続けることの固有の意味も見いだされます。このような視点に立つと、農村の価値を捉えるためには、農村で生活する住民や農村にかかわる人々が、何にどのような価値を見いだしているのかを理解することが重要だと言えるのではないのでしょうか。「農業の多面的機能」のような客観的な指標も、住民にとっての価値を一般的な価値に翻訳し、政策に反映させるためのツールになるからこそ意義があります。農村の住民自身と農村の外部の人が、人と自然の多様な関係性や歴史的な蓄積を踏まえながら、ともに農村の価値を考えることが重要だと思います。

農村の将来像をどう描くか？ —イギリスの経験は参考になるか？—

安藤光義（東京大学大学院 教授）

私はイギリスの経験から、農村をどう描くかお伝えします。イギリス農村の実態は、日本とはかなり違います。そして、日本でも農村生まれでない人が増えることによって、イギリスと同じような状況が生まれると思います。

イギリスには原則として小農はいません。農林業複合経営は囲い込みによって追い払われ、農業は徹底的に産業化されました。農業＝環境破壊産業と認識されています。また、イギリスでは都会の豊かな中産階級が都会の家を処分して農村に移り住む田園回帰（Counter-urbanisation）が起きています。農村には豪華な1億円もするような住宅が売りに出て、それを買える金持ちが住みます。イギリスの田園回帰は日本の田園回帰とは別物で、俗物的なように思います。これは、土地利用規制が厳しいため農地転用ができないこと、農村こそ人が住むところという憧れがあるからです。一方、小農は大陸ヨーロッパに残っています。例えば新規参入者、農家の若返りということを支援しています。

イギリスでは、客観的な所与のものが社会を規定するのではなくて、概念が社会をつくると考えています。議論し、新しい発想のもとで農村社会をつくり上げ、つくり変えていくことができます。実際、論点を

明らかにするために自由—保守、経済重視—環境保護重視の対立軸をつくり、4つの象限から農村とは何かを議論し、農村政策を考えてきました。

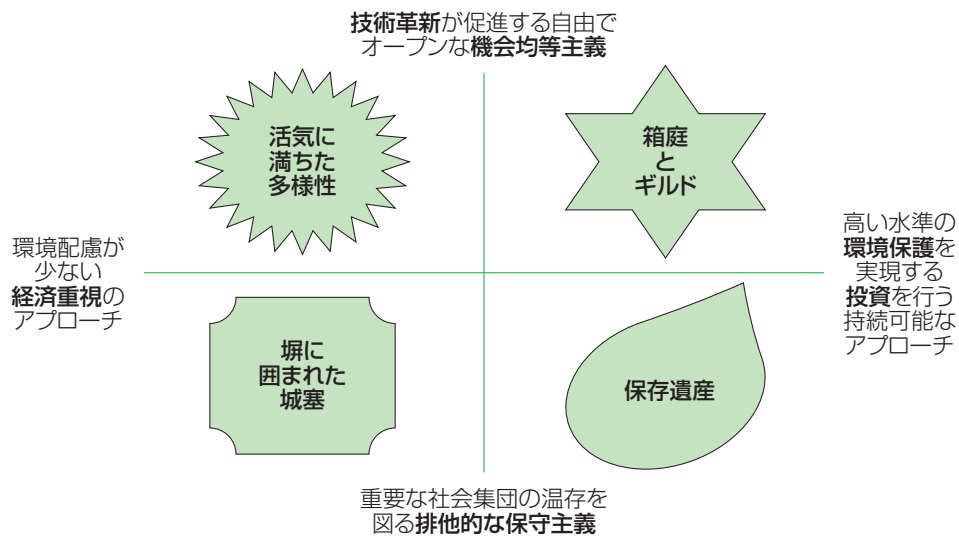


1つ目は「箱庭とギルド」です。景観は昔のままですが、家の中ではコミュニケーション技術に支えられて、プログラム開発、エディター、あるいは研究者といった人たちが住んで近代的な暮らしをしているイメージです。景観を損なわず、建物を壊さない限り、地下を掘ってもかまいません。徳島の神山町がこのイメージに近いと思います。農業はもうからないため、農業以外で農村経済を支える必要があり、このような農村経済をつくるとするスタイルです。

2つ目は「活気に満ちた多様性」です。都会を脱出して、楽しい空間、レジャーランドといったツーリズム、定年退職者を対象としたサービス業が展開する場としての農村をイメージしています。

3つ目は「保存された遺産」です。農村は歴史的遺産の保全、あるいは自然環境遺産の保護のための場で、その伝統的な価値を残すために国民の総意として公的支出が重要な役割を果たすという考え方です。在

将来の農村像を展望するうえでイングランドが描く4つのイメージ



資料 Future foundation (2005) "Rural Futures Project: Scenario Creation and Backcasting" の Chart 1を基に安藤作成

来種を守り、外来種は排除するなど生物相も保存の対象となりますし、入れる人の数も当然制限して、国立公園のように管理するイメージです。

4つ目は「塀に囲まれた城塞」です。農村は経済的自由主義に基づき、金持ちが住む場所となるイメージです。

以上は極端なケースですが、これらを示して議論することが重要です。農村のあるべき姿を議論できるための素材の提供という点で意味があると思います。日本も農業とは全く関係がない、「農業サークルぽてと」のような人たちがどういうイメージを持って農村をつくるかが、今後の農村政策を考えるうえで一番大切ではないでしょうか。

価値というのは、どこか別のところにあるいいものを持ってくるのではなく、自分たちのうち裡にあるものの表出です。日本の農村像をどう描くかは、私たちみずからが決めるべきもので、模範解答はありません。発想、意思、希望が社会をつくり変えていきます。

我々は経済原則に従属しています。そこから脱却し、新しい意思を持たないと、社会をつくり変えることはできません。「あなたの幸せ、私にしわ寄せ」の言葉のとおり、ほかの人にしわ寄せをしないような行動、倫理、あるいはお金の使い方が求められます。そして、お金とは何かを考えることを通じて農山村の価値を考え直すことが日本社会の再生につながっていくと思います。

小さな村が輝くオーストリア —「生きる価値のある田舎」の国—

石田信隆（農林中金総合研究所 客員研究員）

私からはオーストリアでの小規模農村の調査をご紹介します。日本の農村のことを考えていきたいと思えます。オーストリアを選んだ理由は、オーストリアの基礎自治体（Gemeinde＝市町村）の規模が非常に小さいにもかかわらず、みんな元気だからです。2,000人以下の市町村が全体の55%で、人口の過半数が10,000人以下の市町村に住んでいます。

オーストリアは日本に似て山国ですので、手厚い農業・農村振興政策が行われています。まず、EUの共通農業政策（CAP）で市場施策と直接支払い、そして農村振興政策があり、オーストリアとしても条件不利地域対策や農業環境政策などの政策をさらに拡充して体系化し、農村支援に力を入れています。

オーストリアには農業を守ることに国民的な合意があり、一般的な畑作農家の農業所得に占める補助金の割合は87%です。こうした合意は、食糧の安全保障だけでなく、多面的機能を保全するためでもあります。また、オーストリアの観光のために美しい景観を守る必要があり、農業を保護しています。小規模農業も支持し、環境に優しい有機農業も強く求めています。

さらに、兼業農家が非常に多いことも特徴です。ウィーンの農林省でヒアリングし

たとき、私が「日本政府は、企業に農業をやらせるべきだ、兼業農家ではなく大規模な法人経営を推し進める、という考えだ」と話すと、不思議な顔をされました。日本とオーストリアの政府が抱く農業観はかなり違います。

オーストリアの人々は、豊かな自然の中で自然とともに楽しみ、その中で子供を育てたい、そういう暮らしができるところに自分で家を建てるのが一番の夢と言います。だから、純農村では大卒の就職機会はあまり多くないのですが、家族ができると農村に戻って、近隣都市へ通勤する就業形態をとる人が多いと聞きます。

村に人が住むために必要なものを村長さんたちに聞くと、豊かで美しい自然、仕事、消防団、そして、みんなで楽しむための組織をたくさんつくることと言います。小さい村でも、ブラスバンドや歌の会だとか、いろいろなものが10以上もあります。栗田さんが言う「愉しみ」に通じると思えます。ある村長さんは、「この村の目標は、生きる価値のある田舎になることだ」と言いました。

村が小さいですから、インフラの整備は



複数の村で組合をつくり共同で整備しますし、議会がありますが、議員はみんなボランティアで議会のときだけ日当をもらいます。役場の職員も少ないです。非常にうまく運営されていると思います。レストラン、幼稚園、小学校、図書館といろいろ回ってきたのですが、楽しい村ということが大事です。

こうした村を活発にし、良くすることを支援する政策が、村のリニューアル(Dorferneuerung)という農村振興政策です。住民の取組みを自治体や州がサポートするやり方で、住民、子供たちがやりたいこと、変えたいことを出し合って、テーマを決め、

州はそれに対して専門家を派遣してバックアップする仕組みです。この取組みがオーストリアではとても盛んです。

今、日本は地方創生と言っていますが、これは上から旗を振っているだけでおかしいと思います。農業が大事にされていないし、農村政策も貧弱です。自然とのふれあいを大事にするという発想が弱く、移住を推し進める以前の問題として、そこに住んでいる人たちが楽しくて幸せでなければいけません。本来、住民主体の取組みをやるべきだし、それを行政が合理的にサポートすることが必要ですが、現状の取組みはおろそかです。

パネラーのコメント

栗田 農村の魅力はその人が感じるものだと思います。ただ、残念なことは、本来の農山村の良さがどんどん失われてきています。経済偏重のなかで、働き方も、暮らし方も、そして、文化を守る形もどんどん失われているということです。こうしたなかで農村の再生、未来像を描けるか、魅力があるのか、を考えることが重要だと考えます。

豊田 飯舘村は震災前6,300人いましたが、その1割がIターンです。1割の人にとって、飯舘村は魅力的な場所です。でも、人口は増えず過疎でもあります。

飯舘村は、「までい」な(手間暇かけた)村づくりをしてきました。飯舘村の行政区

が、それぞれ企画を出して中山間地の補助金を使い、共同作業での村づくりに価値を見いだしていました。ただし、外から来た人がそのことに価値を持ったかどうかは別です。震災でいち早く避難した人は、Iターンで来た人です。つまり、土に先祖伝来という思いはないということだと思います。

私も先祖伝来の土地という言い方をそのままには肯定できません。なぜならば、日本の敗戦で旧満州から戻った人たちが阿武隈山地に入植しているからです。他方で、入植を受け入れた経験がおそらくIターン者の受入れにもつながったのだと思います。

一方で国は、村人が村をどうしていこうという話は抜きに、除染し、露骨に戻そうとします。村に戻ろうという人たちは、「ま

でい」を無視せざるを得ません。ですから、村をつくってきたという自負心があればあるほど、「もう、お私たちの村ではなくなった」という思いを、私のようなよそ者に話すのです。原発事故は、「までい」な村づくりを志す人々の気持ちまで破壊し、村民を分断に追い込んでいます。

森田 ぼてと企画室で中山間地域に行きますと、地域の方の温かな受入れ、農家での宿泊など、とても新鮮で、しかも、落ち着きが得られました。

地方出身の学生は恐らく農業の現場や集落の文化を知っていると思うのですが、東京出身の学生は、集落が何かを知りません。そのため、村に入ったら田んぼがあったり、畑があったり、そこで大切にされている伝統があったり、文化があったりということを感じますので、それは新鮮な経験が得られると思います。

ただし、例えば実際に移住するとなると、ぼてと企画室で行った周りの人たちでもすぐには決断できないですし、ハードルが高いと思います。

寺林 近年、大学生が地域の魅力発見のお手伝いをするパターンが多く見られます。外部の視点で地域の魅力を指摘することによって、地域の人が魅力に気づいて取組みが広がることは多いです。「農業サークルぼてと」のような団体が地域に行って活動するだけでも、その地域のさまざまな価値が見いだされる動きにつながると思います。

太陽光発電は目的ではなく手段ですから、何のために導入するのかが一番大事です。例えば、耕作放棄問題を解決するという目的のために、村のみんなで出資して、耕作放棄地に太陽光パネルを設置するという取組みがあります。太陽光発電も、農村全体の利益に引きつけて考えれば、農村再生の新しい道具として活用することが可能になると思います。逆に農村に資するための手段とならなければ、村人には受け入れられないでしょう。

安藤 農山村が豊かになるということは、自分たちの力をつけることが一番大切だと私は思います。その場合、外から新しいものを積極的に取り入れつつ、しかし、お金も含めそれに支配されないで、自分たちの主体性を維持しながら変わっていくことが重要です。

再生可能エネルギーも重要な手段で、自分たちのために役に立つように使うことができれば、すごく重要な施策になるはずです。

もう1つ、農村と都市とでどっちの高齢者のほうがミゼラブルか、という問いです。下町の寅さんのような密接な集団があれば別ですが、私は、都市のほうが惨めだと思います。農山村に限定する必要はないのですが、自然、里山といった生活を大きく支えてくれるものがあつたほうが互いに支え合うような人間関係は生まれやすい気がします。しかし、それには40歳代後半から50歳代くらいまでに農山村に移住して人間関

係を築かなければならないでしょう。単にお金だけでは農山漁村の人たちとつながりをつくることはできません。

石田 日本では、農村に東京か大阪の資本が立派な観光施設やスキー場をつくり、そこで出た利益はみんな東京に行ってしまいます。一方で、オーストリアの農村にスキー場がありますが、お金が地元に着るようになっていきます。再生可能エネルギーも同様のことが日本とオーストリアでは言えます。農村に利益が還元されるような制度設計や政策立案をしなければなりません。

オーストリアは農業の補助金が潤沢だと言いましたが、補助金依存体質ではありません。地元の人たちが頑張った結果、お金が地元の中で回り、活気が生まれる政策の仕組みを日本は取り組む必要があります。

今、若者たちが、新しい自分の人生を描く舞台になるのではないかという思いで農村に向かい出しています。それを支える仕組みを、地域の人たちも国も考えなければいけないと思います。

栗田 私たちの活動は、日本の時代の流れに多少なりとも逆らってきました。経済優先、都市化という時代のなかで、昔からの村の生き方を続けてきたところに人が来てくれて、私たちがかかわった人が元気を出し、喜んで、先輩は死んでいきました。

私は、農業、農山村に関心を持って自分の生き方を探そうとしている若い人たちに期待しています。この若い人たちの小さな

動きが、日本の大きな流れに逆らうきっかけになると思います。

森田 ぼてとの活動は、農業の現場を変えたいとか、日本の農業の未来を変えたいからどうしようとか、必ずしもそういうことを考えているわけではなく、むしろ、農山村に行って、いろいろな話を聞いて、いろいろなものを食べて、そういうことがおもしろい、楽しいと感じているからやっています。ぜひ、現場に足を運んで、目で見てほしいと思います。

安藤 飯舘村と金山町など町村合併をしていないところで新しい動きが起きている点が重要だと思います。これはオーストリアも同じです。日本は「中央分権、地方集権」です。中央は担当する事業・予算しか関心がない部分最適化行動です。そうではなく、全体にとって必要なモノ・コトは何かを明らかにし、そこに知恵を出せるかどうか重要です。イノベーションはどこからどのようなプロセスで起きるのかも考える必要があります。



寺西 1977年、ジョン・ケネス・ガルブレイスが『The Age of Uncertainty：不確実性の時代』という本を書いてベストセラーになりました。これになぞらえれば、今は「The Age of Unseen：先が見えない時代」に入っていると思います。しかし他方で、私たちには、はっきりと見えていることがあります。それは、農業・農山村なくして人間社会の持続可能な発展はあり得ない、ということです。農村は都市なしでも生きられますが、都市は農村なくして生きられません。持続可能な人間社会を支えるうえで基本となる農業・農山村の価値をきちっと守っていくことが、これからの時代におい

てますます重要な課題となってきています。

栗田さんが書かれた『十三戸のムラ輝く』の冒頭に、「山里は水清くして人貧し。そういわれるようになったのはいつ頃からだろうか」とあります。これを「山里は水清くして人愉し」「人豊か」にどう転換していけるかが、今日議論したポイントだったと思います。私たちは、この転換に向け、政策のあるべき姿を引き続きこのプロジェクトで追求していきたいと思っています。

(とりまとめ 研究員 多田忠義
〈ただ ただよし〉)

